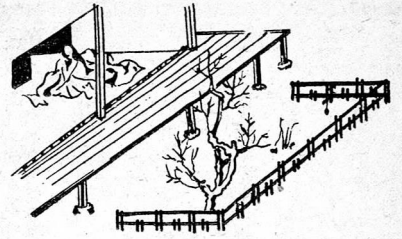


# 垣 の 話

岸村茂雄



死のよう  
な、灰色の  
町——私  
は、日本で

あのような淋しい町は未だ知らない。猫一匹見かけない町（勿論、人も住んでいるのだが）私はそう感じたのだ。はがねのように荒い潮風が、町かどを支配していた。

くらい日本海に向つて屏風の様になぞり立つた岩山、その裾をこくと、波が刻んでいて、岩と海の間の僅かな岩屑の上に、さざえのようにしがみついていた町。私はその名を知らないが、信越線を直江津で乗換え糸魚川へ向つて、確か、二つか三日の駅の町だった。

——その年の夏、十九歳の私は、東京から信越線廻りで富山市にて、その郊外で一月ほど造園工事で過し、剣岳から立山へ抜けたが、素通りしただけのその町の印象が、妙に強く何時までも残つた。その時の旅情は、一連の天然色フィルムを見るように、美しく美しい記憶だったが、その町の部分のこまだけが、冬のような灰色となつてきているのだ。悲しいほどつめたい、記憶の色だった。

何故、そのような荒涼をそこに感じたのであるか。潮風に洗われた、柿葺のさびた灰色からであろうか。僅かな土地を争うようにしてひしめきあつた家並の構図か。それともあのかぐろい海の、潮騒か。造園家である私は、こうも思う。——一番の原因は、樹がないからではなからうか。殊に、家の感じを安定させる美しい「垣」の線が、どこにも見られなかつたからではなからうか、と。

潮風の害のために、私たちの見なれていく緑の樹と、美しい「垣」がひとつもないということは、これ程迄に町を荒涼とさせる。

その時から私にとつて、「垣」とは、外敵の防禦、防風、防火など住宅の防護としての存在よりも、美しい環境を造り出すための、一つの重大な景物として、強く考えられるようになった。

人は、住宅の外観をととのえるものとして、「垣」の外側を見るが、その内側の美を追求する人は少い。私はここに、美の立場からのみ「垣」のあつかい方について語り、蛇足といわれるか知れぬが、家庭で簡単に作れる「四ツ目垣」の作り方を附してみた

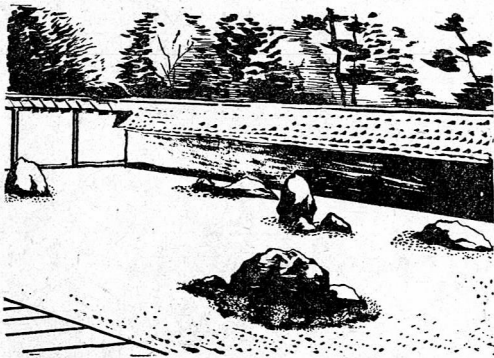
いと思う。これも要は、「垣」というものの美を知り、幾らかでもそれを読者の実感としていただきたいという、願いからなのである。

一 「垣」は地色、木石は模様

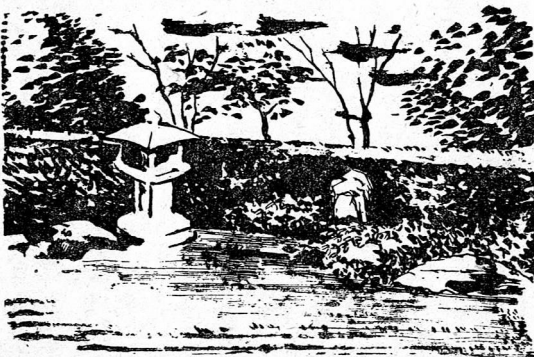
庭をまとめてゆくにも、着物の地色と模様のような関係があつて、地色が粗雑であつたなら、模様が如何に良くともひきたらない。日本画で、紙が悪ければ、いかに良い墨を使つてもはえないように、緑の芝生の上にあるから花壇や日時計も目立つので、地色が汚い土であつては、それが美しい風景とはならない。日本庭園で、白の敷砂を使い、苔を張り、或いは冬に敷松葉で地面をほかすのも、つまりは、庭の地色を尊重することろみなのだ。

平庭とは、いわば、「垣」という紙の上に

1 図 竜安寺方丈の庭

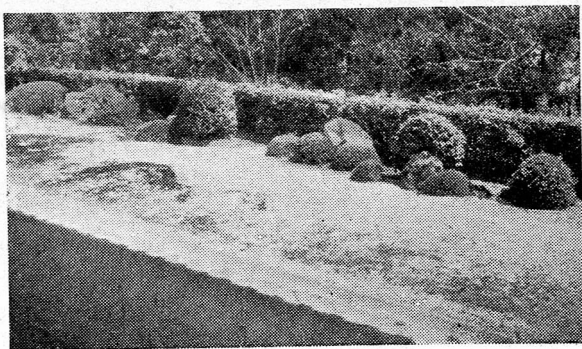
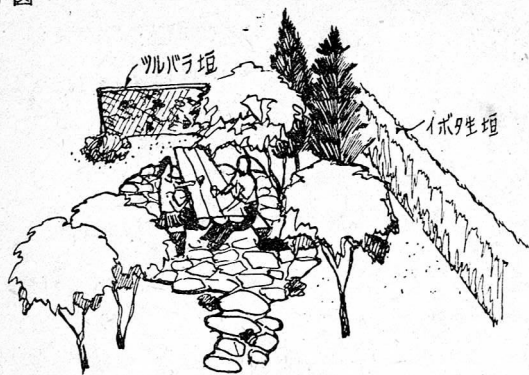


2 図 勸修寺書院の庭

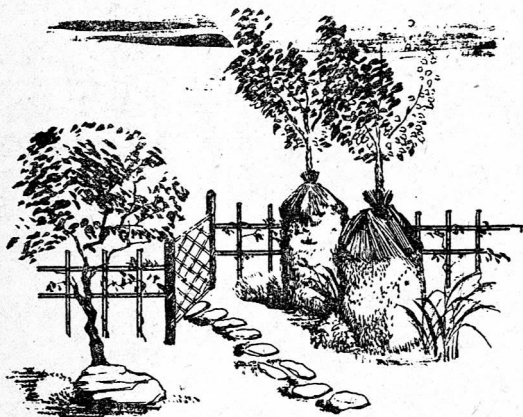


木石を絵具として描いた立体画で、（写真一）龍安寺の石庭にせよ、大仙院、大徳寺方丈、勸修寺書院前の庭園など、はじめから「垣」の地色を計算に入れてたもので、これらの庭から「垣」を取去つた姿を想像することは出来ない。（一図、二図）

だから、「垣」の良否が庭の死命を決定する場合もあり得るわけで、庭を造らせるものも、建築家も「垣」についてもつと敏感でなくてはならない。都会では、必要上良かれ悪かれ家の外周に「垣」を造るが、地方に行くと、あけつびろげの場所に、やたらに木石を配し、灯籠を置いて作庭しているのにおつかるが、これではなかなかまとまりが得られないし、費用がかさんだ上に、うっかりすると美の統一がとれなくなつてしまう。はじめに「垣」を造つて着手した



4 図 農家の縁先も「垣」と若干の飛石で庭にまとまる



らと、残念に思うことがある。  
 このことを逆からいうと「垣」が良かったら、簡単な材料でも庭のまとまりは得られるということ、(三図、四図) 近代的な明るさも、それから、所謂枯淡閑寂な味もそんなところから生まれ易い。

二「垣」の種類、外垣のこと

住宅の外周の「垣」には、コンクリート塀、板塀が普通に用いられているが、その他土塀、煉瓦塀、石積の垣も少くない。土塀は、日本住宅の「垣」には理想的で、良い土の得られる京都、奈良地方には良いものが見られる。(写真二) 築地塀に、竹、青楓の影がそよぎ、秋は、壁を背景に紅葉が浮きでるのはまさに絶品であるが、地方によつて築造に無理な点もあり、極めてて

地方の「垣」として注目してよいものに、石積がある。設計を工夫することによつて、いろいろの建築様式にも合し、その用いる範囲は極めて広く、附近から産出される石で、地方色豊かに造ればよい。私の見るところ、北海道には庭の景石としての良い石は少ないが、地方によつて変つた石が多く産出されるから、設計に工夫をこらせば、住宅のみならず公共建築、観光方面の諸施設に面白く、北海道の風物にもあう。また他の「垣」には、降雪上本州よりも施工及び維持に不利な点が多いが、石積にはこれが少ない。積み方は自由に注意することとしては、同じ大きさ色の石のみ用いては変化がないから、

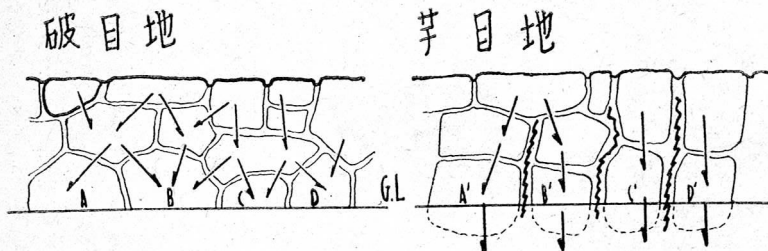
少なうなつてきている。しかし、この良さが消え去るということは考えられなく、何時かは近代建築の中にも、何かの形で取入れられてくることと思う。

煉瓦塀は、野趣味ある庭の背景としては面白く、高さを低くして、下草として山草やしだ類の群落をあしらつたりすると、油絵の静物のバックのような、変つた色調を出すことが出来る。

写真 2 西芳寺の築地塀



5 図



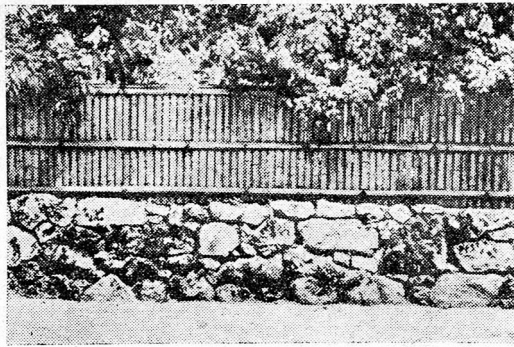
下層の石A、B、C、Dに上層の力が平均にかかり、重量を地盤に分布する。

A'、B'、C'、D'に力が不均等にかかり、不同の沈下をきたしキレツを生じる。

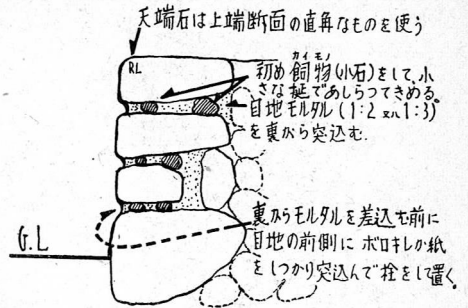
色彩の組合せに注意し、大きい石の周りには小さい石を用いるようにすると、変化の差を大きく感ずることが出来る。大体において下層に大きな石を据え、上層にゆくにつれて小さな石を多く積んでゆく方が、仕事早く、安定感が出る。また、四ツ目地(芋目地)は、美と力学の両面から絶対に避け、破目地にしなければならぬ。(五図) 空積にして、目地に附近から採集した山草や高山植物をはさみ、ウォール・ガーデン風(壁庭)としても面白く、練積とする場

合には、深目地にして、灰墨（松煙墨）で着色したモルタルを使つた方がよい。（六）また、腰積として他の垣と併用し、その用途は広い。（写真三、七図A B C D E）

写真 3 銀閣寺の垣

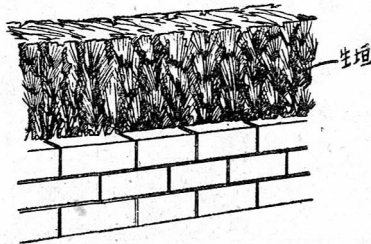


6 図

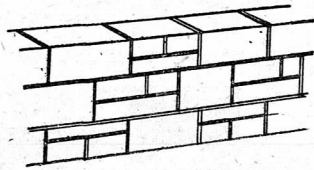


横積の断面

7 図



A A、B登別石の赤、小豆、青色に大谷石の白を配すると明るい垣となる。

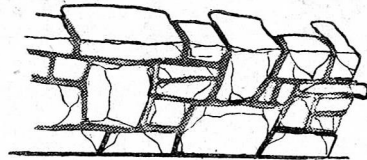


B

私たちが、住宅内の部屋で茶を点てる際に、屏風を立てて一つの雰囲気を作ることがあるが、庭園内においても、そこに一つのまとまりのある落ち着いた局部を造るために、視界を完全に遮るとい



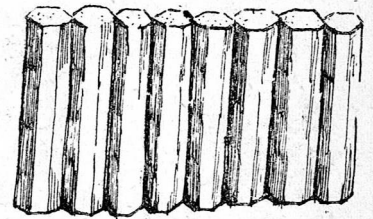
C 張碓石の目地は黒（松煙）赤（弁柄）紫（両者の混合）のモルタル目地としてよく空積として高山植物を配してもよい。



D 水平の線を強調した積み方で和洋両建築に、また北の風物によくマッチする。

三内垣

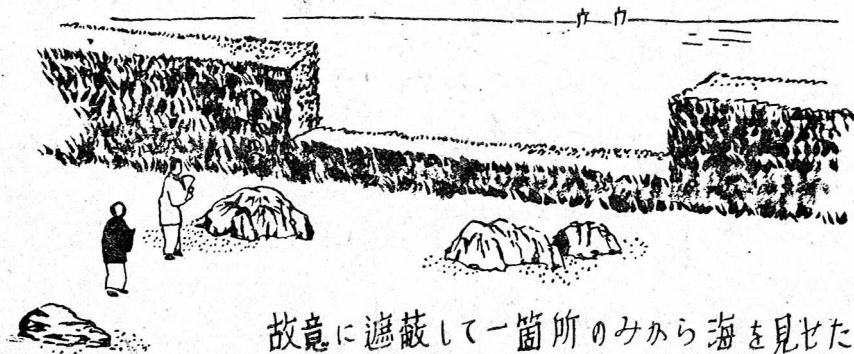
板塀には、堅、横張り、目透し、敷目張り、大和張り、その他これらに竹を交えての色々の張り方があり、日本建築にはよく合うものであるが、控材が内側に見えることが困りもので、植込か何かの施設物でかくすように心掛けたい。



E 柱状節の石は縦に使つて目地は必ずモルタル目地とする。

住宅に用いる場合には、積み方に真行草の差を考えてほしい。  
コンクリート塀は、防火のため、都市では余儀なくされているが、あの無味乾燥さは庭の味とはならない。塀の内側を植込でかくすと、塀自体に杉皮張りか竹の「とくさ」張りをするか、或いは内側に竹垣を作るかして、地色を整えなくてはならない。それが出来ないなら、石で腰張りだけでもするか、すだれをさげて壁面をかくすようにしたい。

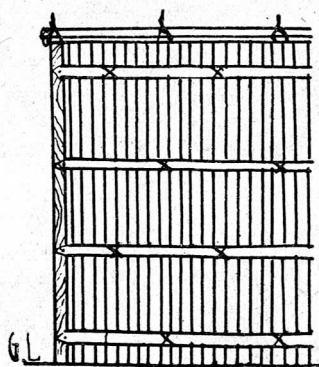
8 図



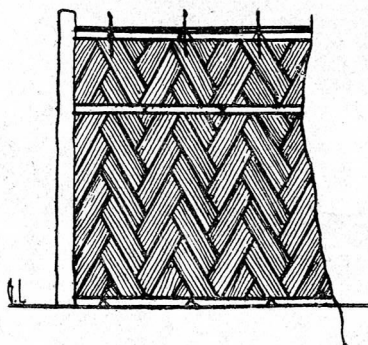
故意に遮蔽して一箇所のみから海を見せた例

のではないが、「垣」を用いて一つの区劃を造る場合がある。その他、時として風致的な効果をねらつて「垣」を設けるが、（八図）これが内垣で、竹垣、生垣、金網柵などが普通に使われている。  
竹垣には、建仁寺垣、（九図）大徳寺垣、沼津垣（十図）相国寺垣、大津垣、桂垣、源氏垣、馬背垣（十一図）

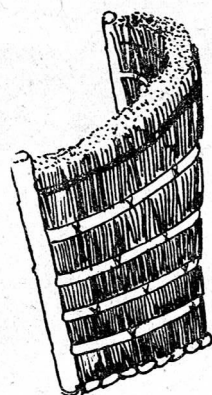
9 図



10 図

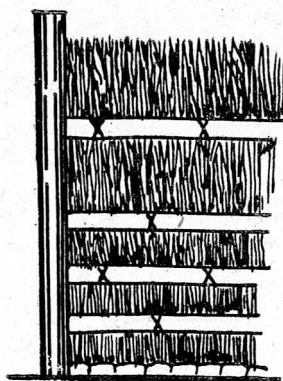


11 図

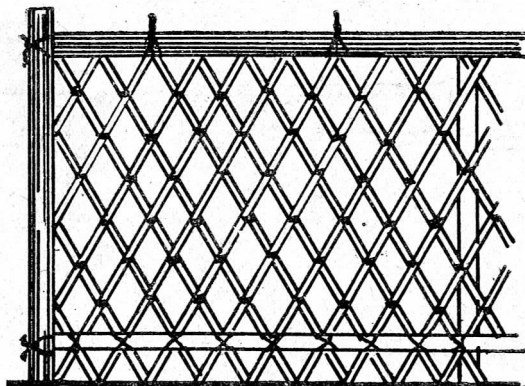


鷺垣（十二図）などが、視界の遮蔽のために使われ、遮蔽はしないが、区劃を作り、一つの雰囲気を出そうとするものに、光悦

12 図

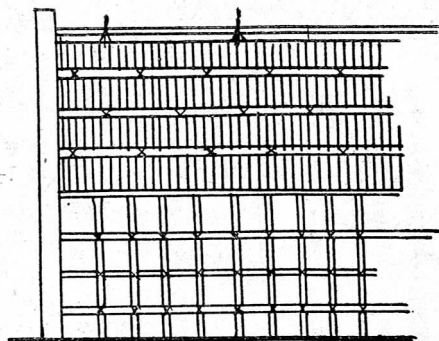


13 図

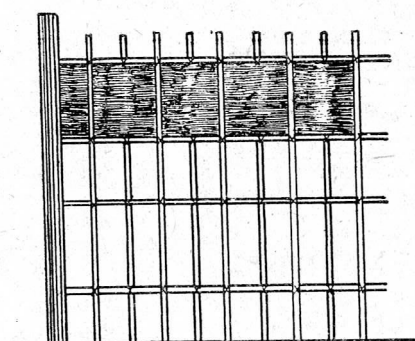


垣（十三図）借楽園垣、金閣寺垣、四ツ目垣があり、目の高さだけを遮り、下からは向側の庭を見せようとするもの、濱垣（十四図）腰透建仁寺垣（十五図）などがある。これらの竹垣は、みなそれぞれにより味を持つていて、その変形も数えきれぬ程多い。

15 図



14 図

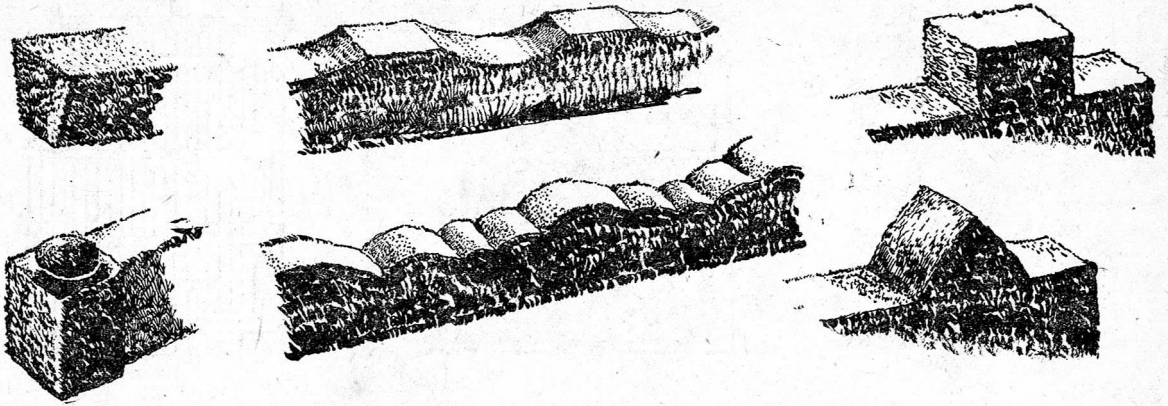


袖垣は、家と庭との視覚的な連結、一つの庭を別の趣で見せたい場合、また、二つの部屋が斜めに見合う時などの視線を遮るためとか、鉢前などのように家に近接して一つの局部を設ける場合の背景、汲取口などのように、見せたくない場所の遮蔽に用いられるが、一つの建築に、沢山の袖垣を

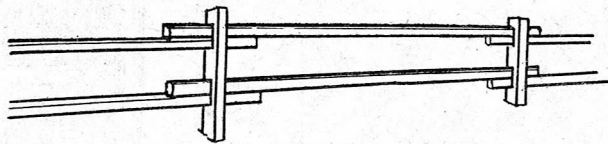
用いなければならぬということ、建築の平面計画が悪いということで、好ましいものではないが、初めからそこに袖垣を予想したというような建築にあうと、この良さは遺憾なく發揮出来る。この型も実に夥しいが、建物の様式や色彩などから、袖垣の型と寸法を決定してほしい。以上述べた垣は、皆、竹の生産地から生れたもので、そのままそれを本道で作るのは無理であるが、場所によつて、どうしても竹垣でないとおさまらぬ所も沢山あり、その味も捨てがたいので、何とか工夫せねばならぬ。私は、胴縁の竹を鉄筋に変えて、結ぶのにも目立たぬように銅線を沢山使い（燻して使うと光つた感じが消える）その上を棕櫚縄で飾結びをするようにしている。また、萩や竹穂を使う場合は、目立たぬよう黒竹の「しのび」を何本も入れて下地を堅固にしてから、押縁をあてている。

洋風建築で、袖垣の役目をするのに、トリス（格子垣）がある。一口にいえば、小割ものを格子に組合せて、ペンキ塗りなどしたもので、アーチ、パーゴラと組合せて明るい感じを出すことが出来る。

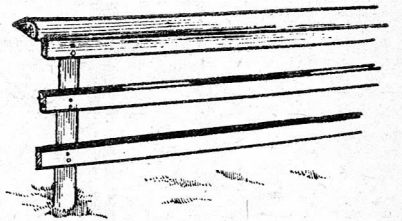
生垣は、「垣」の中で一番にやわらか味を表現出来るもので、大徳寺吹寄せの如く落葉樹を混植した垣には、四季の変化を豊かに盛ることが出来る。本道で用いられる樹種に、イチイ（オノコはアイヌ語）イボタ、ポプラ、トドマツ、アカシヤ、ヤナギ、カツラ、カラマツ、ウツギ、ニレ、ネグンドカエデ、ボケ、ムクゲ、ハギ、ウコギ、ユキヤナギ、ツルバラなどがあるが、オノコ、



17 図のイ



17 図のロ



オンコが主要木だとのことで、映画などにもよく、いろいろの型の美しい刈込生垣が出てくる。(十六図) 私は、北の風物

といえ、でもヘツチ

主の生垣を造成しては、将来がまことに心細い。英国

イボタがその殆どをしめては、オニコは、寒地に強く、刈込に耐え、保護手入が簡単で、病虫害が少なく、更に、芝生の明るいグリーンに濃緑色の葉が良く調和し、確かに北国の「垣」として一級品であるが、現在のよう

種別摘

庭園樹苗類の御案内

(大量の際は特に勉強いたします)

八重桜	八重咲美麗、庭園、公園、学校園用	四尺	七〇〇	六〇〇
えぞ野桜	耐寒性強く、花淡紅色美麗	四尺	七〇〇	六〇〇
吉野桜	發育良く、花付多い有名な桜	四尺	七〇〇	六〇〇
公孫樹(いちょう)	秋の黄葉と葉の形美麗、寒気に強い	四尺	七〇〇	六〇〇
ナナカマド	春の萌芽、秋の紅葉と赤い実は美麗	三、四	七〇〇	六〇〇
野村もみじ	萌芽時より秋季まで燃ゆるような紅葉は有名	二	一〇〇	〇
満洲野桃	桜より開花二週間早く、強健、花数多し	三	八〇〇	六〇〇
黒田紅梅	八重咲、濃紅の美花、耐寒性強し	三	七〇〇	六〇〇
花海	春先枝一面のピンクの花を着け、樹勢強健	二、三	七〇〇	六〇〇
ライラック	一名リラと呼ばれ花は房状芳香強く、強健	二、三	三〇〇	二〇〇
ネグントカエデ	生育頗る速く、各地の風土に適す	二	一〇〇	八〇
ヤチゲモ	湿地によく生育し、屋敷林、防風林として好適	二	五〇	四五〇
黄金小手まり	目の覚めるような黄金色の葉は庭木として最良	二	五〇	四五〇
雪柳	早春可憐な数多の純白の花を着け庭園用に最適	一株	六〇	五五〇
ぼけ	深緑の照葉の中に真紅の花をつけた枝は生花にもよい	二	五〇	四五〇
れんぎよう	早春枝一面に黄金色の花をつけ美麗、生育速い	二、三	四〇	三五〇
赤目柳	赤味を帯びた枝と萌芽時の淡紅色の芽が美麗	二、三	四〇	三五〇
玉吹	常緑の小灌木、和洋何れの庭園、公園にも最適	径五寸	一五〇	一三〇〇
草吹	小葉で枝多く生育旺盛生垣用樹として最適	一株	四〇	三五〇
えぼた	小葉で枝多く生育旺盛生垣用樹として最適	二、三	一〇〇	一〇〇

の特色として、オニコの生垣苗を養成してゆくことは、北海道の種苗会社のこれからの使命の一つであるとも考えている。  
金網柵は、洋風庭園の「垣」として木柵(十七図)と共に用いられる、特にバラを絡ませてよくその価値が出る、バラ垣とする場合は、柱はアングルとして、十二番線の金網を取付けて白ペンキ塗りとする。北海道では冬用の時、金網に絡んだ枝をとる不

便はあると思うが、私は、平均に枝条を伸し得るので、バラ垣としてはこの柵が一番良いように思う。ツルバラは一間に二本が適当する。  
以上、便宜上「垣」の種類を内、外に区別して述べたが、勿論はつきりした区分があるわけがなく、建築様式にもつともしつかりした「垣」を選べばよい。(未完)  
(雪印種苗囀託造園士・札幌市在住)